



## 宣

伝も兼ねて書かせてもらうのだが、再来月四月十四日、塾主催で「いきいき寄席」を松江の観光寺月照寺となりの東林寺で行う。午後一時半開場で午後二時開演。入場料は投げ銭にしようか今も迷っているが、これまで千円と刷り込んだチラシをいくらか配布しており、だんだんと変更しにくくなっていく。出演は、これから入塾があれば増えるかもしれないけれど五名、そして上方落語家の笑福亭喬若さんをゲストとして招く。

喬若さんとは、出会って十三年になる。奥出雲で仲間たちと落語会をしようという話で盛り上がったものの、どこに相談したらよいか誰も知っている者がいなかった。わずかな予算しかないのだから、テレビによく出てくる落語家など正攻法で呼べるはずもない。落語好きの知人に聞いたら、大阪で観光クルーズに乗ったら若手の落語家さんが座を楽しませてくれた、と喬若さんの名前を覚えてくれた。どう調べたものか忘れてしまったが、喬若さんと直接連絡が取れて、来てもらうことになった。一度も落語を聞いたことがないが、若手だから安いだろうという理由で招くことになった(喬若さんごめんさい)。実際安かった。渡した出演料が後で見たら多すぎたので、来年また来ます、と正直すぎる約束をして帰るほどに。

翌年、せっかくだからと師匠の笑福亭三喬(現笑福亭松喬)さんとともに来てもらった。師匠の二人会もすばらしく楽しかった。

酒は一切吞まず、牛乳が大好きで、絶えず落語のマクラのごときおしゃべりを聞かせる喬若さんとの出会いがなかったら、ぼくは高尾小学校で落語をしようとは思いつかなかったかもしれない。

塾で落語教室を始めることになったとき、喬若さんには真つ先に知っておいてもらいたいと思った。塾生が誕生したときには、いつしよに寄席をしようと思っていた。そんな話を伝えたら、

「二月に仕事で城崎に行くんですわ。その前後で寄りましょか？」

塾生の稽古に寄ろうかという提案が喬若さんから届いた。城崎と松江はついでの距離じゃないことを知らないのじゃないか、と思ったが、それには触れず、ぜひお言葉に甘えたいと小狡い返事をした。

つい先日、毎年松江が騒がしくなる日、喬若さんは教室で子どもたちの落語を聞き、そして実演をしてくれた。どんな高座でも、どんなお客さんの前でも全力投球、それを目の当たりにした子どもたちである。どんな言葉で説かれるより、プロの心構えをしつかりと心に刻みつけたに違いない。

## 空き家 7

## 木幡智恵美

## これからの家①

道路を挟んだ斜め前の家は、一人暮らしの方が施設に入れられ、しばらく空き家になっていた。昨年縁者である若夫婦が住むようになり、ここところ改装でもされるのか、軽トラが入りしている。少し先の、ご夫婦共に施設に入られて一昨年家を解体して更地になっていたところには家が建つ。クレーンが入ったなと思っ行ってみると、柱が何本も立てられた。こういうのを在来工法というのか。住まわれるのは、以前住んでいたご夫婦の縁者か全く違う人かは分からない。息子の友だちが住んでいた近所の数軒ある住宅は、うちより後から建てられた。そのうちの軒は、ご夫婦で施設に入られた後空き家になり、時折息子さんらしい方が掃除や庭木の手入れに来ていた。そこが今改装中だ。

近頃散歩途中、家をつぶした後に新築する家やリフォームする家をよく見かける。中には、この前基礎を作っていたのに、次に通りかかった時には一階部分が出来ているところもある。在来工法により、そちらの方が圧倒的に多い。そして、駐車場は三台分以上がほとんどだ。我が家を建てた頃はそういう見通しなどなく、子どもたちが車を持ち出すと、近所の駐車場を二台分借りなければならなくなった。

生家や現在住んでいる家の行く末に関心が向いている今だから余計に目に付くのかもしれない。業者の名前がびつくりするほど多い。見慣れない名前がたくさんあるの。夫にそのことを話すと、「以前は工務店だったのが、しゃれた名前に変えたんじゃないか」と言う。そうかもしれない。とにかく、建築業者の多いこと、リフォームの会社の多いこと。

コロナ禍からリモートワークが増え、そのために自宅で仕事できるようにと改築したり、思い切つて家を建てたりといったことがあるのだろうか。金利が低い今のうちというのもあるかもしれない。家は暮らしの場であり、そこに住まう一人ひとりの人生を築いていく場だ。子どもがいる家は、その成長を中心に据え、家族が共に育つていくところ。家が建ち、リフォームされる様を見ていると、それだけで活力が沸いてくる気がする。

30代フリーター このあいだ「伝説のコンサート 美空ひばり」というNHKの番組を見て、ひばりの身振りや表情は演説する田中角栄に似ているなあと思った。

年金生活者 ふたりとも二度とあらわれることのない昭和の2大天才だ。というより、この先、同じような人物があらわれても、時代は決して天才として遇することはないだろう。

30代 今の日本の天才といえば、大谷翔平、藤井聡太、井上尚弥がすぐ頭に浮かぶ。

年金 ひばりと角栄が圧倒的な熱量を放出していたのに対し、その3人はクールさを手放さない。つくり、蓄積する天才が前者だとすれば、後者は崩し、享受する天才だ。

つくるときに必要なのは前に進む勢いだ。重力に逆らうパワーがないとビルは建てられない。それを担う人間は熱くならざるを得ない。崩すときに必要なのは繊細な行動だ。ビルを解体するとき、それを欠くと、周辺の建物ま

えざるイノベーションを利潤の主要な源泉としている。それはやがて限界に突き当たり、今後は経済の外部のイノベーション、具体的には国家のイノベーションがないと、つまり再分配の仕組みが根本から変わらないと、資本主義は利潤をあげるのが難しくなるだろう。ダイクの指摘はそれを予感させる。

30代 イノベーションといえば、第4次産業革命が進行中と言われる。

年金 第4次産業革命についてウィキペディアは「物理、デジタル、生物圏の間の境界を曖昧にする技術の融合によって特徴づけられる」と説明している。その通りだとすれば、これまで離れる一方だった人類と宇宙がふたたび近づき始め、人間の根源的な願望である母胎の宇宙への帰還を社会が代替する可能性が生まれる。

ウィキペディアによれば、第4次産業革命は「技術が社会内や人体内部にすら埋め込まれるようになる新たな道を表している」。それによって「次第

で壊してしまう。それに携わる人間はクールになることを強いられる。

む必要はない」と語っている（2月16日朝日新聞朝刊）。世界で日系企業が生み出す富はGDPには反映されにくい。これからは国境の内側の富だけでなく、海外での所得を再分配すること

年金 ひばりと角栄が、第2次産業を牽引車とする産業資本主義の時代の天才だとすれば、大谷、藤井、井上は、第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義の時代の天才と言うことができる。前者は生産を中心とした資本主義の時代の天才であり、後者は消費を中心とした資本主義が生んだ天才だ。

を考えるべきだ、と彼は言う。ダイクの主張は、経済はグローバル化したのに、政治は国家単位のままになっているという矛盾の指摘でもある。資本主義システムによる富の分配は地球規模になったのに、その再分配は今なお国家の内側だけで行われている。

角栄はこの列島にインフラをつくり、そこでモノをつくるのをあと押しする政治を進めた。ひばりの歌はそれに携わる人々への応援歌だった。大谷、藤井、井上は、それぞれ野球、将棋、ボクシングの既成のイメージ、既成の枠を解体し、その風景を変えた。

国家による富の再分配の最大ものは社会保障だ。グローバルゼーションは移民労働者を増やし、日本も事実上の「移民大国」になった。社会保障の対象はもとからの日本国民だけでなく、移民にも広げざるを得ない。これはダイクの言う「海外での所得の再分配」と表裏の関係にある。

30代 そのポスト産業資本主義下の日本がGDPでドイツに抜かれ、世界4位に転落した

30代 ダイクはその主張を具体化する方法を語っていない。

年金 リチャード・ダイクという、日本をよく知る企業経営者が「嘆き悲しに生物と機械を区別できなくし（動物との意思疎通など）、最終的にはバイオテクノロジーやナノテクノロジーを用いた人体改造でポストヒューマンを生み出すことを可能にする。その時点で、人間の思考は機械の情報処理と統合され、真の意味で拡張可能になり、人類進化は次のステージに進むことになる」という。

30代 第3次までの産業革命とはだいぶ違う。

年金 蒸気機関が繊維などの軽工業を発展させた第1次産業革命と、電気と石油が重化学工業を発展させた第2次産業革命は、自由競争市場という、自然とは異なる新たな領域を切り開いた。デジタル化を推進力とした第3次産業革命は、その領域をさらに超えるバーチャルな領域を生み出し、自由競争市場をいっそう拡大した。それらの革命はいずれも人類を自然から、言い換えれば宇宙から遠ざける革命だった。母胎の楽園を追われ、荒野に放り出された乳児が、やがて道を切り開き、成人して母から遠ざかる過程とそれは対応している。

第4次産業革命は、広がった人間と自然と宇宙との距離を飛躍的な技術によって縮める革命を意味する。それが進めば、人類はかつてのような自然と宇宙とともにある生活に戻っていき、そのぶん自由競争市場の支配から脱していく可能性がある。そのとき資本主義は主役の座を降りることを迫られるだろう。

ニュース日記 912  
中村 礼治

## 資本主義が向かう先